様式５

# 2004年度　学長裁量経費（プロジェクト経費）実施報告書

| テーマ | 教員養成大学における図書館利用教育の検討<br>（図書館利用教育プロジェクト） | | |
|---|---|---|---|
| 代表者及び共同研究者名<br>（代表者に○印） | 氏　　名 | 所属部局講座等 | 役割分担 |
| | ○斉藤秀平 | 学校教育講座 | 総括 |
| | 瀬田祐輔 | 学校教育講座 | 調査 |
| | 川嵜正広<br>（2005.1～2006.3） | 総務部総務課 | 調査 |
| | 安藤友張<br>（2005.1～2005.12） | 名古屋芸術大学短期大学部<br>図書館 | 調査 |

研究成果の概要

図書館活用能力を具えた教員の養成について検討するために，図書館利用教育の実態を明らかにし，学生の意識を分析した。その結果，次の点が明らかとなった。

・わが国の教員養成大学の附属図書館における図書館利用教育について，その範囲は，「印象づけ」，「サービス案内」，及び，「情報探索法指導」にとどまり，また教育学に特化した内容，及び，方法をとってはいない。但し，教員に必要な情報活用能力の育成を見据えた「情報表現法指導」をも扱うべきと考える館も複数みられ，現在実施している館も存在する。

・本学学生の読書実態の調査結果から，１ヶ月の読書冊数をみると，よく読む層と全く読まない層との両極に分解しており，また，男女差も大きい。本の購入に関しても，よく購入する層と全く購入しない層の両極に分かれている。さらに，本を読みたいという動機は「自分自身の楽しみのため」が第１位であるが，その他にも多様なものをもっており，「知的探求のため」という動機もまた強い。また，読む本の選択のきっかけに友人のすすめが挙がっており，そこからの読書も大きな比重を占めている。

・本学に限りはしないが，未だ図書館利用教育は一部の取り組みであり，学生への学習・研究支援システムとして大学内で確立していない。７割近い学生が図書館利用教育へは参加しておらず，教員となるうえで必要不可欠な能力との自覚は低い。しかし，利用教育への参加経験がある学生は，資料検索能力の向上など何らかの成果を自覚しており，図書館に対する要望も強い。

従って，本学においては，図書館利用教育のうちの特に「印象づけ」，及び，「サービス案内」を授業に組み込むことを教員に周知していくこと，及び，学生の要望を受け入れるシステムを構築しつつ，図書館利用教育を大学のカリキュラム内に位置づけていくことが求められているといえる。